

一般口演

8. ～医学生Presents～

「初学者に優しい」「合理的に学べる」東洋医学勉強法

松岡 沙耶¹⁾・長谷川 可季音¹⁾・坂井祐太²⁾

1) 国際医療福祉大学プライマリケア研究会東洋医学部門

2) 伝統鍼灸心月院 院長

我々は、在学している国際医療福祉大学にて、発足4年目の新設間もない部活動で東洋医学を学び始め、今年で3年目になる。1年目は先輩の元で学び、2年目で部活動の代表に着任した。今年度で代表を務めるのは2年目である。

1年目は、学生主体のプレゼンを通して東洋医学の基礎を学んだ。例えば一度の勉強会で、「気」や「肺」などテーマを決めてスライドを作り発表した。初めての概念に戸惑いながらも、相談役の鍼灸師や先輩の助けを借りつつ、学びを続けた。

2年目になり、自分達が部活動を率いていく立場となった。学習法は既存のものを踏襲したが、参加していた新入生が徐々に来なくなり、参加率の低さが問題となった。そんな時、順天堂大学東洋医学研究会に参加し、初めて症例検討を行った。大変苦勞したが、普段の勉強会に比べて、格段に新しい知識を学ぶことが楽しく、またそれらが定着したように実感した。今振り返ってみると、従来の勉強法では知識は増えるが、断片的に蓄積されてしまうため、他の概念との関連性及び実臨床での活用法が理解しにくく、新入生達の興味を引き続けることが困難であったのではないかと考えた。

3年目を迎えた今、これまでの経験を踏まえて、新入生が勉強会に継続的に参加してもらえよう、症例検討ベースの勉強会を開催している。聴き手がプレゼンターの説明を受動的に聴くのではなく、挙げられた疾患の病理を自分なりに考える機会を与えることを意識している。

そこで今回、東洋医学を学び始めて1年目、2年目、3年目と我々の学び方がどのように変化し、どういった点で躓いたかを考察し、「忙しい医学生のための」「初学者に優しい」東洋医学の勉強会を実現すべく、少し前まで初学者だった我々の観点か時間の限られた医学生を対象とした東洋医学勉強会のあり方を提案する。

一般口演

9. 医学生が東洋医学から学びたいこと —現状に対する懸念と今後の研究の展望—

石井 絵麻¹⁾・一原 愛心¹⁾・吉良 明海里²⁾

1) 鹿児島大学医学部医学科2年

2) 横浜市立大学医学部医学科2年

【目的】

大学での東洋医学の講義にその哲学および実践や実体験の機会を持ち込む最適な方法を見つける。

【方法】

実際に医学生として学習している中で感じたことや先行研究をもとに東洋医学や鍼灸などを通して体得したいことを共有する。東洋医学の哲学及び実践や実体験を授業に取り入れるために現状の問題や学生が実際に抱く将来への展望、体得したいこと等を明確にし、どのようなアプローチ方法があるかを検討する。

【調査背景】

現在の医学教育では自分の哲学を構築する機会や自己分析の機会が少ないため、各医学生は医学教育を通して体得したいことや将来の展望が不明確なまま医学を修めている現状がある。

鍼灸をはじめとする東洋医学の学習は、西洋医学とは異なる医療思想を持つ性質から、学生が多様な医療のあり方や治療方法を認識する機会となる。しかし、机上の理論だけでは東洋医学のエッセンスに抜けを生じさせる可能性があるため、東洋医学の実践や実体験を通すことでその学習効果を最大限にできるだろう。

東洋医学の授業において学生の関心を得るためには、学習内容を学生の将来への展望や体得したいこととすり合わせる必要がある。全国の医学生を対象に、学習意欲や将来の展望について、医学教育研究室や学務による調査¹⁾などが行われている。しかし、これらの意識調査は回答率が低く、実態とは乖離した内容が反映されている可能性がある。

【結論】

自身が医学を学ぶ動機や目標が曖昧な学生が多い現状がある。この現状は東洋医学学習を通して改善できると考えられる。効果的に東洋医学学習を教育に取り入れていく方法を探りたい。

【参考文献】

1) 公益財団法人川野小児医学奨学財団 (2023) 『【アンケート結果】医学生の志望理由・学生生活・進路に関する意識調査』 <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000015.000104845.html>
(最終閲覧日：2023年7月22日)

一般口演

10. 月経前症候群の東洋医学的病態の分布における年齢の影響

津村 佳生¹⁾・友岡 清秀²⁾・謝敷 裕美³⁾・吉田 大悟¹⁾・西村 陽¹⁾・武田 卓⁴⁾・谷川 武^{2) 3)}

1) 順天堂大学医学部

2) 順天堂大学医学部衛生学・公衆衛生学講座

3) 順天堂大学大学院医学研究科公衆衛生学講座

4) 近畿大学東洋医学研究所

【目的】

わが国では月経前症候群（Premenstrual Syndrome: PMS）に対し、漢方や鍼灸等が広く用いられているが、PMSの東洋医学的病態に関する疫学研究は少ない。本研究では、成熟期女性を対象にPMSの東洋医学的病態の分布における年齢の影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

PMSを自覚する成熟期女性464名を対象としてWeb調査を実施した。PMSの評価はPremenstrual Symptoms Questionnaire¹⁾を用い、中等度以上のPMSの有無を評価した。東洋医学的病態は東洋医学健康調査票²⁾を用い、八綱病証、気血津液病証、臓腑病証を評価した。PMSと東洋医学的病態について多変量ロジスティック回帰分析を行い、標準偏回帰係数を算出した。また、年齢を三分位（18-19歳、20-26歳、27-44歳）に分類し、層別解析を行った。

【結果】

全体では、中等度以上のPMSのオッズ比[95%信頼区間]は八綱病証では実証1.45[1.25-1.68]、虚証1.26[1.08-1.47]、気血津液病証では気滯1.33[1.19-1.48]、気虚1.24[1.10-1.39]、臓腑病証では脾1.19[1.09-1.31]、肝1.18[1.06-1.31]、心1.15[1.03-1.29]の病証で中等度以上のPMSとの有意な関連が認められた。さらに年齢を三分位に分類し、層別解析を行ったところ、18-19歳は実証、血瘀、気滯、脾の病証、20-26歳は実証、気滯、脾の病証、27-44歳は虚証、気虚で中等度以上のPMSとの有意な関連が認められた。

【結論】

本研究より、年齢が上がるにつれてPMSの証が実証から虚証へと傾向が変遷することが示唆された。

【参考文献】

- 1) Takeda T, Tasaka K, Sakata M, Murata Y. Prevalence of premenstrual syndrome and premenstrual dysphoric disorder in Japanese women. Arch Womens Ment Health. 2006 ;9(4):209-12.
- 2) 和辻直, 関真亮, 篠原昭二, 矢野忠, 嶺尾徹. 東洋医学健康調査票における健康評価の検討. バイオ・ファジィ・システム会誌. 2013;15(2):47-54.

一般口演

11. 「東方医学おからだ手帳」(日本東方医学会 患者情報システム)について

長瀬 眞彦^{1) 2)}・竹下 有³⁾・友岡 清秀⁴⁾・謝敷 裕美⁵⁾・野頭 智一⁶⁾

1) 吉祥寺中医クリニック

2) 順天堂大学医学部医学教育研究室

3) 清明院

4) 順天堂大学医学部 衛生学・公衆衛生学講座

5) 順天堂大学大学院医学研究科 公衆衛生学講座

6) 神奈川衛生学園専門学校 非常勤講師

【目的】

日本東方医学会として、問診票を使った患者情報システム 「東方医学おからだ手帳」を開発したので報告する。

【方法】

「東方医学おからだ手帳」は 日本東方医学会と順天堂大学医学部衛生学・公衆衛生学講座が共同開発した、パソコンでもスマートフォンでも使うことができる問診票による患者情報システムである。東洋医学的な診療を行う医師、鍼灸師、薬剤師などの全ての職種において使用可能である。このシステムを利用する希望施設は、登録申請が必要で、許可は日本東方医学会が行う。患者側は、登録施設から提示されたQRコードを読み込み、登録すると問診票にアクセス出来るようになる。東洋医学的な問診票に答えてゆくと、最後に、その時点で妥当性が高いと思われる証がレーダーチャートで表示される。レーダーチャートには、寒熱・虚実、気血津液、五臓のどこにアンバランスがあるか一目瞭然で分かるようになっている。受診毎に回答することも可能であり、経時的な変化も評価できる。また、証のデータは、ICD-11の東洋医学的病証のコードと対応させており、CSVファイルでダウンロード可能であるため、様々な臨床研究への応用が可能である。

【結果】

現在試用段階中であり現時点で報告できる結果を報告する。

【考察】

様々な診療や研究への応用が可能なシステムであり多くの施設の参加を期待する。